



分科会 13 慢性疾患患者へのファーマシューティカル・ケアを考える

10月8日(月・祝) 10:30～13:00 第4会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター 4F 43+44会議室)

W-13-04

糖尿病患者に対する薬剤師の役割

きたけ まきこ
佐竹 正子
恵比寿ファーマシー

生活習慣病の筆頭である糖尿病患者数は増加の一途をたどり、重症合併症を併発する患者も少なくない。糖尿病治療は食事・運動・禁煙・薬物と言われているが、その中でも薬物療法に関しては近年新規開発薬も登場し治療法の選択肢が増えてきている。1枚の処方せんから医師の治療計画を理解し、医薬品の適正使用のためにどのような服薬指導ができるのか、そして患者の血糖コントロールが改善して生涯にわたるQOL向上に何ができるのかを薬局薬剤師の視点で検討してみた。

抗糖尿病薬の目的は血糖値を下げることである。しかしその効果が強く出た時に副作用として低血糖が発現する。低血糖は一般的には血糖値が70mg/dL以下になった時に、まず交感神経症状として発汗・振戦・動悸・頻脈などが現れ、50mg/dL以下になると中枢神経症状が現れ異常行動や昏睡となることもある。服薬指導の際に行う低血糖指導に必要なことは、低血糖の原因と症状説明、発現の有無、発現時の正しい対処法の説明と理解度の確認は良く行われている。最悪の昏睡を防ぐには患者が低血糖症状を感じたら、条件反射的にぶどう糖摂取ができることが大切である。しかしライフスタイルが多様化した現在、患者に合わせた指導をするには低血糖が起きてからの対処法の説明だけでなく未然に防ぐ補食の説明ができることも低血糖指導に含まれると考える。低血糖の原因となる「食事に係わるエネルギーが不足」または「運動によるエネルギーの使用量増大」に合わせた補食指導をすることでぶどう糖摂取により急激な血糖上昇を起こすことなくコントロールが改善する。食事時間が遅れる時は少量の炭水化物を事前に摂る、激しい運動をする前はたんぱく質も含んだ食品を摂るという説明で患者は低血糖を回避することができる。

インスリン注射療法は新規導入患者にとってデバイス操作は簡単に覚えられるとは限らない。病院・クリニックで指導を受けたにも関わらず、来局すると操作が怪しくなっている患者も少なくない。医療の流れの中で最後の医療スタッフである薬局薬剤師がデバイス操作を熟知して対応できるならば、インスリン初期導入が完結することが多い。またインスリン治療歴が長い患者でも操作の省略や勘違いで誤った操作をすることもあり、薬局薬剤師が操作確認することはインスリン注射の適正使用につながる。デバイス操作はA.注射針をつけるまでの準備 B.空打ち C.単位設定 D.注入操作 E.針の廃棄に大きく分けることができる。Aは懸濁インスリン製剤では攪拌操作が濃度差のない注射液を作り正確なインスリン単位の注入へ結びつく。使用後回収したインスリン注射液を調べると残液に濃度差がある報告もあり、各社に合わせた混和説明を心掛けたい。また針は平行に移動させず被せるように装着すると、インスリンカート側針がカート内に進入せずインスリン液が出ないことがある。Bはベテランの患者でも空打ちの2単位をもったいないと思いついて省いていることがある。空打ちは針とカート内の空気抜きとデバイスの動作確認の目的がある。これを省き針が正常に装着されていないデバイスではインスリン注入がされず圧だけがかりデバイスの破損となることもある。Cは患者が指示通り単位設定しているかを確認したい。糖尿病連携手帳を見れば薬局薬剤師であっても医師の指示単位を確認できる。高齢者では手帳を再確認せず思い込みで以前の指示単位を打ち続けていることもある。Dは注射部位や注入後の抜針の確認をする。一般的には腹部への注射指示が多いが、患者は痛みが少ない部位があるとそこだけへ注射をしがちである。同じ場所への注射はリポハイパートロフィという硬結を作り、硬結部位はインスリンの吸収が悪くインスリン注射単位が増加する。インスリン初期導入者へは注射部位を毎回変え硬結を作らないこと、硬結が出来てしまった患者へは部位を変えインスリン吸収を良くして注射単位の減量と共にコントロール改善へ結びつく指導をすることが大切である。Eは多くの薬剤師会で使用済み注射針の回収業務を行っている。専用の針ボトルがあるが、患者はペットボトルへ入れて持ってきてしまうこともある。家庭内そして回収する医療従事者の針刺し事故を防ぐためにも正しい針の処理方法を説明したい。

HbA1cが改善した患者へ食事・運動・薬物別に良好化となった理由を確認すると、食事も運動も変化が何もない患者では「薬を忘れず飲んだ」「注射を正しく打った」というのが挙げられた。本年4月より薬剤服用歴管理指導料の中に「残薬の確認」が追加された。薬局薬剤師が残薬を確認するとともに、病態に合わせた糖尿病薬の処方理由を正しく伝え、患者が服用意義・注射手技を理解することがノンコンプライアンスを防ぎ、良好な血糖コントロールが得られる良策となる。